



第 155 号

二〇一八年一月三日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畷傍町一番地
編集者 鈴木裕明

橿原考古学研究所創立八十周年記念式典

昭和一三（一九三八）年九月一三日に設立された橿原考古学研究所は、創立八十周年を迎えた。これを記念して本年六月一六日に創立八十周年記念式典を開催した。

式典は、当研究所が歴史文化科の講義と発掘実習を担当する奈良県立法隆寺国際高等学校の吹奏楽部のファンファーレで幕を開けた。式典には、日本国内の考古学・文化財研究機関・博物館、大学の関係者、県内社寺・経済界の代表、行政関係者のみならず、当研究所と交流のある中国・韓国・シリアなど、海外の考古学・文化財関係機関の研究者も参加され、国際色豊かな様相を呈した。式典参加者は約三六〇名であった（写真1）。司会進行は奈良テレビアナウンサーにつとめていただいた。当研究所設置者を代表して荒井正

吾奈良県知事、式典参加者を代表して岩田国夫奈良県議会議長、森下豊橿原市長、崔鐘惠韓国国立文化財研究所長から、橿原考古学研究所の活動が今後ますます発展することへの期待を込めた祝辞をそれぞれいただいた（写真2）。このほか、中国陝西省考古研究院、中国寧夏文物考古研究所よりいただいた祝電を披露した。

また、「奈良県立橿原考古学研究所創立八十周年を祝う会」（代表・久保田昌孝橿原神宮宮司）より研究支援事業（黒塚古墳発掘調査報告書の刊行支援、可搬型蛍光X線分析機器の提供）の目録を贈呈いただいた。

当研究所からは、八十年間の歩みの中で、当研究所の運営と調査研究に永年にわたって携わり支えていただいた、杉本憲司氏（佛教大学名誉

次 目

橿原考古学研究所創立八十周年記念式典
新山古墳群黒石支群出土の石材とその採石地
奈良県立橿原考古学研究所研修記（上）
中国における研修（下）
研究所催し物・附属博物館展示案内
海外交流

編 集 部	編 集 部	編 集 部	編 集 部	編 集 部
8	8	6	4	2

教授、当研究所研究顧問、田中英夫氏（元当研究所共同研究員）、宮川徳氏（当研究所共同研究員）、神田須津子氏（初代友史会副会長）、安田博幸氏（武庫川女子大学名誉教授、当研究所研究顧問）、室賀照子氏（当研究所研究顧問）の六名の方々に對し、

功労者表彰として感謝状を贈呈した。
式典の最後に、菅谷文則所長が「古代日本の輝き―奈良県立橿原考古学研究所八十年の研究成果―」と題し、八十年間を代表する遺跡の調査・研究などを紹介した。



写真1 式典の様子



写真2 荒井知事による挨拶

新山古墳群黒石支群出土の 石材とその採石地

奥田 尚

一、はじめに

奈良県広陵町にある新山古墳群黒石支群の発掘調査が、一九八〇年一月から一二月にかけて実施された。その時に出土した一〇号墓(図1・6)で三点、一一号墳(図1・19)で一五点、一二号墳(図1・20)で三点、一四号墳(図1・22)で六点、合計二七点の石材を裸眼で観察した。これはすでに調査のなかで取り上げられていた石材で、調査担当者に出土位置の教示をいただいた。原位置を示すものは一石もない。拳大の大きさで、表面が滑らかな川原石様の石が二〇点、割れた面がある石(割石)が七点である。

観察した石材を伴う墳墓・古墳について、一九八〇年度の奈良県遺跡調査概報(一九八二)の記述によれば、一〇号墓は一辺が約一〇mの方形台状墓で、木棺を直葬する墓壇が二基ある。一一号墳は径が約一八×二三mの円墳で、木棺を直葬する二基の主体部がある。一二号墳は約一×一三mの方墳で、小石室と木棺

直葬の主体部がある。一四号墳は約八×一六mの方墳で、二基の主体部がある。これらは一〇号墓を頂上とする小丘状地形の斜面に築造されている(図1)。

新山古墳群黒石支群が位置する馬見丘陵は、「馬見一里は石なし二里」の言葉のように、親指大の石すらも含まない砂礫層や粘土層が分布する地で、これらの地層は大坂層群下部層に対比されている。観察した石材は全て他地域から運ばれてきたものである。以下に、石材の石種の特徴とその採石地、石材の使用傾向について述べる。

二、石種の特徴と石材の採石地

石材の石種は、アプライト質黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、石英閃緑岩、斑礫岩、黒雲母流紋岩、柘榴石黒雲母安山岩、角閃石安山岩、輝石安山岩A、輝石安山岩B、輝石安山岩C、ガラス質溶結凝灰岩、火山礫凝灰岩である(表1)。石種の特徴と採石推定地について述べる。採石地については同様の岩相の石が採取で

きる近距離の地とする。

アプライト質黒雲母花崗岩…色は灰白色で、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明、粒径が三〜六mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が五〜一五mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色・粒状で、粒径が一〜二mm、量がごくわずかである。葛城市太田付近の山地や太田川の川原石にみられる。

黒雲母花崗岩…色は灰白色で、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が一〜六mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が一〜三mm、量が多い。黒雲母は黒色・板状で、粒径が〇・五〜四mm、量の中である。太田付近の葛城山寄の山地や太田川の川原石にみられる。

石英閃緑岩…色は淡茶灰色で、石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が三〜四mm、量がわずかである。長石は淡茶灰色で、粒径が五〜八mm、量が多

い。黒雲母は黒色・球状で、粒径が一〜一〇mm、量が多い。角閃石は暗褐色・柱状で、粒径が二〜八mm、量がわずかである。葛城山の山地や太田川の川原石にみられる。

斑礫岩…色は暗灰緑色で、長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色透明、粒径が一〜二mm、量が中である。角閃石は黒色、粒径が二〜五mm、量が非常に多い。輝石は褐色透明、粒径が一〜一・五mm、量がわずかである。葛城市の岩橋山付近の山地や竹内付近の熊谷川の川原

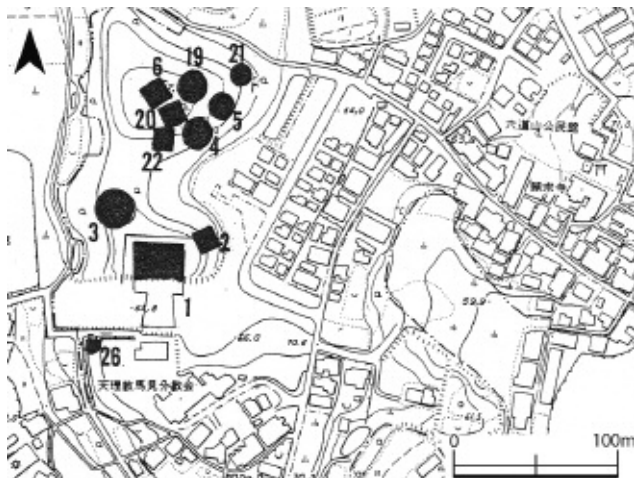


図1 新山古墳群黒石支群で石材を観察した墳墓・古墳の位置(6:10号墓、19:11号墳、20:12号墳、22:14号墳)

表1 新山古墳群黒石支群の墳墓出土の石材

石種	10号墓		11号墳		12号墳		14号墳		合計		採石地
	川石	割石	川石	割石	川石	割石	川石	割石	川石	割石	
アプライト質黒雲母花崗岩			1				1		2		太田
黒雲母花崗岩			1						1		太田
石英閃緑岩			4	2					4	2	太田
斑禰岩			1						1		竹内
黒雲母流紋岩					1				1		穴虫
柘榴石黒雲母安山岩	1			2			3		4	2	穴虫
角閃石安山岩					1		1		2		穴虫
輝石安山岩A			1						1		穴虫
輝石安山岩B	1			1					1	1	上中
輝石安山岩C	1								1		?
ガラス質溶結凝灰岩					1				1		名張川
火山礫凝灰岩				2				1		3	高山
合計	3		8	7	3		5	1	19	8	

石にみられる。
黒雲母流紋岩…色は灰色で、流理方向に斑晶鉱物が並ぶ。斑晶鉱物は石英、長石、黒雲母である。石英は無色透明、粒径が〇・二〜〇・三mm、量がごくわずかである。長石は灰白

色、粒径が〇・三〜〇・四mm、量がわずかである。黒雲母は黒色、板状で、粒径が〇・三〜〇・四mm、量の中である。石英は灰色、ガラス質である。葛城市の二上山雌岳付近の山地や香芝市の葛下川の川原石にみられる。

柘榴石黒雲母安山岩

岩…色は灰色で、黒雲母が流理方向に並ぶ。

斑晶鉱物は長石、黒雲母、柘榴石である。長石は灰白色、粒径が〇・五〜六mm、量が多い。黒雲母は黒色・板状で、粒径が〇・五〜三mm、量が多い。柘榴石は濃赤色透明、粒状で、粒径が〇・七〜一・五mm、量がわずかである。石英は灰色、ガラス質である。二上山の西側斜面に広く分布する黒雲母安山岩に似ており、香芝市の穴虫から逢坂にかけての葛下川の川原石にみられる。

角閃石安山岩…色はアズキ色で、角閃石の柱状斑晶が目立つ。粒

形が角で、粒径が二cm程の細粒黒雲母花崗岩の捕獲岩が含まれることがある。斑晶鉱物は長石と角閃石で、流理方向に並ぶ。長石は灰色透明・柱状で、粒径が〇・三〜〇・七mm、量が多い。角閃石は黒色・柱状で、粒径が〇・三〜三mm、量が多い。石英はガラス質である。二上山雄岳にリング状の岩脈で分布する安山岩の岩相の一部に似ており、穴虫から逢坂にかけての付近の葛下川の川原石にみられる。

輝石安山岩A…色は淡黄灰色で、斑晶鉱物が長石と輝石である。長石は灰白色・短柱状で、粒径が〇・五〜一・五mm、量が多い。輝石は黒色透明・柱状で、粒径が〇・三〜一mm、量がわずかである。石英は暗灰色・ガラス質である。羽曳野市の春日山の山地や葛下川の川原石にみられる。

輝石安山岩B…色は灰色で、不定形な板状節理がみられる。稀であるが、径が一mm程の捕獲品の石英がみられる。斑晶鉱物は長石と角閃石である。長石は灰白色、粒径が〇・五〜〇・七mm、量がごくわずかである。角閃石は黒色、短柱状、粒径が〇・五〜一mm、量がごくわずかである。石英はガラス質、やや粒状である。香芝市の上中付近の山地や葛下川の川

原石にみられる。

輝石安山岩C…色は褐色で、長石の斑晶が目立つ。斑晶鉱物は長石、黒雲母、輝石である。長石は灰白色、粒径が〇・五〜三mm、量が非常に多い。融蝕されて球状を呈するものが多い。黒雲母は青銅色透明・柱状で、粒径が〇・五〜二mm、量の中である。石英は暗灰色・ガラス質である。このような岩相の石を見聞していない。産地不明。

ガラス質溶結凝灰岩…色は黒色で、溶結している。構成粒は、石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明・粒状で、粒径が〇・三〜〇・六mm、量がわずかである。長石は灰白色・粒状・短柱状で、粒径が〇・三〜一・五mm、量がわずかである。黒雲母は黒色・板状で、粒径が〇・七〜一・五mm、量がわずかである。基質はガラス質である。宇陀郡一带に広く分布する室生火山岩の黒色の溶結凝灰岩の岩相の一部に似ている。このような礫は、木津川市から上流の名張川の川原石に稀にみられる。

火山礫凝灰岩…色は灰色で、構成粒が流紋岩、ガラス質溶結凝灰岩である。流紋岩は灰色・ガラス質で、粒形が角、粒径が一〜二五mm、量が非常に多い。ガラス質溶結凝灰岩は

黒色・ガラス質で、粒形が角、粒径が二〜三mm、量がごくごくわずかである。基質は白色・緻密である。香芝市穴虫の高山採石場跡付近の山地にみられる二上層群上部ドズルボー層の火山礫凝灰岩の岩相の一部に似ている。

火山礫凝灰岩・色は灰色で、構成粒が流紋岩・軽石・柘榴石である。流紋岩は灰色や暗灰色、ガラス質で、粒形が角、粒径が〇・五〜一五mm、量が非常に多い。軽石は灰白色・多孔質で、粒形が垂角、粒径が〇・三〜二mm、量がわずかである。柘榴石は濃赤色透明・粒状で、粒径が〇・五mm、量がごくごくわずかである。基質は白色・緻密である。香芝市穴虫の高山採石場跡付近の山地にみられる二上層群上部ドズルボー層の火山礫凝灰岩の岩相の一部に似ている。

三、石材の使用傾向

観察した石材の形状と石種の岩相をもとに採石地を求めれば、葛城市の太田付近・竹内付近、香芝市の穴虫付近・上中付近・高山石切場跡付近、名張川となる。

石材の採石地と墳墓との関係をみると、一〇号墓では穴虫や上中付近の葛下川の川原石、一一号墳では太田付近の太田川・竹内付近・穴虫や

上中付近の葛下川の川原石、高山石切場跡付近の火山礫凝灰岩の割石、一二号墳では穴虫付近の葛下川や名張川の川原石、一四号墳では太田付近の太田川や穴虫付近の葛下川の川原石、高山石切場跡付近の火山礫凝灰岩の割石が使用されている。出土石材の全てを観察していないが、墳墓を築造するために複数箇所から石材が運ばれている。この石材の採石推定地は名張川の一石を除けば、香芝市から旧當麻町にかけてとなる。

四、おわりに

馬見丘陵付近に分布する墳墓の石材をわずかに観察しただけであるが、石材を採石できる地が被葬者と何らかの関係を持つ地であるとすれば、これらの墳墓は香芝から當麻にかけての周辺に居住していた者と関係する者の墓となる。

香芝から當麻にかけての石材が使用されている古墳には、築山古墳・巢山古墳・新山古墳・ナガレ山古墳・池上古墳・乙女山古墳・久渡古墳群などがあり、川西町の島の山古墳では奈良盆地東部の花崗岩類が使用され、石材の採石地が異なる。奈良盆地東部の石材を使用する古墳の竪穴式石槨の石材には、柏原市国分市場の芝山に分布する芝山火山岩

(橄欖石安山岩・玄武岩)の板石が使用され、馬見丘陵の古墳ではこの石材がみられない。古墳の分布からみれば、馬見丘陵の東端を境に古墳に使用される石材が異なると言えよう。

参考文献

奈良県立橿原考古学研究所一九八二「新山古墳群」奈良県遺跡調査概報一九八〇年度
河合町教育委員会一九八八「史跡乙女山古墳」河合町文化財調査報告書第二集
奈良県立橿原考古学研究所一九九二

奈良県立橿原考古学研究所研修記(上)

西北大学文化遺産学院 孫 麗 娟

一、はじめに

二〇一七年七月二八日から二〇一八年一月二七日までの六ヶ月間、私は奈良県立橿原考古学研究所で研修を行いました。研修の主な目的は、日本考古学の最新技術と理論を学ぶこと、特に有機遺物(皮革、紙、織物、木製品など)の保存技術を学び、中国の有機遺物の保存科学の特徴と結び付けて、私自身の文化財の分析・保存技術、環境保護技術などの認識を高めることにありました。

「池上古墳」奈良県遺跡調査概報一九九一年度」

川西町教育委員会一九九八「島の山古墳」川西町文化財調査報告書第一冊

奥田尚二〇〇一「磐園陵墓参考地の葺石の石材」『書陵部紀要』第五二号

奥田尚二〇一二「吉陵墓参考地の葺石石材の石種とその採石地」『書陵部紀要』第六三号(陵墓篇)

上牧町教育委員会二〇一七「史跡久渡古墳群発掘調査報告書Ⅱ」上牧町文化財調査報告書第四集

二、橿原考古学研究所での研修

①保存科学棟

日々の研修は楽しく、毎週火曜日から木曜日には、保存科学棟の鍵谷さん・村田さん・河原さん・中尾さん・榎本さんから日本語を学び、楽しい雰囲気なかで、日本の風土・人情・生活・伝統・文化・日中の違いなどを知り、日本文化についてかなり理解することができました。日本人の仕事・学習・生活・社会活動などについても知ることができ、日

本人のまじめな仕事の態度、多種多様な学習形式、各技能の育成・伝統文化の継承の重視、多くの普及啓蒙活動、人々の多様な余暇の過ごし方、各種のお祭り、小・中学生の演劇や展示、これらによって日本人の生活・学習が極めて向上しているのだと感じました。

保存科学の研修は、この分野が専門である所員の奥山誠義さん・河崎衣美さんの指導のもと行いました。主に有機遺物と金属遺物の保存処理、自然科学分析について学びました。

奥山さんはユーモアがあり楽しい方ですが、仕事への取り組みは厳格でまじめでした。一緒に獣毛が付着した金属遺物を観察したときは、彼は資料に対して非常に深遠にかつ細かく観察を進め、その資料の特徴を把握し、獣毛繊維とその接着に使用している材の赤外線スペクトル分析を行い、成分を解析していました。

機器分析では、私にとってこれまでよりさらに知見を広げることができました。分析作業と機器使用は密接な関係にあって、文化財の特性を熟知することで正確に文化財の成分を分析できることを改めて感じました。文化財の分析データの蓄積は、

精密な分析作業の基礎となるもので、我々はさらに努力して、ややもすれば粗くなる分析作業の現状を改善して、帰国後は基礎作業を改めて整理し系統化したいと思いました。

このような自然科学分析の研修では、奥山さんとともに河崎さんにも大変お世話になりました。河崎さんにはやさしく美しく聡明な方で、長期にわたり石質文化財の保存・研究に従事され、日本と中国の石質文化財の保存、環境による石質文化財の劣化の研究に参画しておられます。

②奈良県内及び周辺の遺跡・博物館見学、現地説明会など

研修期間中には、奈良県内の著名な寺院、正倉院展、奈良県内外の発掘調査現場の見学、現地説明会への参加、さらには和紙作りの見学もさせていただきました。

法隆寺や東大寺の見学では、古代寺院建築の特徴が理解でき、これらの保存修復の理念に感銘を受け、古代建築保護の重要性を改めて感じました。奈良国立博物館開催の正倉院展では、多くの中国唐代の文物に通じる展示品をみて、日本にいなながら唐代文物の特徴を一層理解することができました。特に私は紡織品や漆器など劣化状況と現状の保存状況に

関心をもりました。

檀原考古学研究所の現地検討会に参加して、小山田遺跡、四条遺跡、纏向遺跡、久渡古墳群、東大寺東塔院、中西遺跡、大阪府東弓削遺跡などの発掘現場を見学しました。日本の発掘調査の方法や弥生時代水田、古墳、古代寺院などの特徴を知ることができました。これらの見学を通して、発掘調査に従事する方々に大変感心しました。特に印象に残っているのが中西遺跡の発掘調査で、各種の足跡を検出していたことです(写真1)。入念かつ正確に調査することで、鹿、猪、人間の大人・子供などが活動した足跡とそれぞれ判断され、ずば抜けた専門性の高い技能を目の当たりにしました。弥生時代水田遺跡と野生動物の活動及び人間の生産活動が関連して検出された重要な成果をみることができました。

発掘調査現場の現地説明会にも参加させていただきました。小山田遺跡では八〇〇人以上、四条遺跡では約五〇〇人の見学者があり、一般の方々の考古学への関心の高さに感服しました。また、研究所所員の現地説明会の運営がすばらしく、人員配置が合理的で、それぞれの担当で所員は職責を果たし、またしっかり連

携がとれており、いずれの説明会も成功裏に終わっていました。

和紙作りの見学もしました。吉野町の福西和紙本舗にて、楮を原材料とした伝統的な和紙の製作工程をみました。楮紙製作は中国唐代に最も盛行し、七世紀に日本へ伝来したといわれております。私はその製作技術に大変興味をもっておりました。

楮栽培から伐採、楮蒸し、楮皮剥ぎ、黒皮削り、天日干し、楮さらし、白楮煮熱、水洗い、紙素打ち、繊維の分解、紙漉き、乾燥までの工程をよく理解することができました。

(以下、156号に続く)



写真1 中西遺跡発掘調査現場での研修

中国における研修 (下)

岡見 知紀

四、安徽省での調査

二月二十八日から三月四日の五日間、安徽省黃山市で資料調査を行った。特に黃山市は、伝統的な墨造りが現在でも続く地域であり、墨造りの調査を主に行った。黃山市へは、西安から飛行機で二時間程である。ただ、飛行機の便数は多くなく、しばしば欠航することもある。実際、帰りの便が欠航となり、予定より二日多く黃山に滞在することとなった。滞在二日目、黃山市で最も著名な墨工場の胡開文墨工場を見学した(写真4)。見学の際し、地元ガイドである洪莉氏の案内を受けた。胡開文墨工場は、胡天注によって、乾隆三〇年(一七五六年)に創業された。工場は黃山市屯溪にあり、古建築が残る老街から北にすぐのところである。今回見学したのは、墨の原料の煤を採集する工程、型入れの工程、彩色の工程である。特に採煤の工程では、伝統的な方法が残されていた。長い石製土台の上に、小皿を置き、その上に蓋をかぶせて煤を採集する。

この方法は、奈良墨造りと共通する。異なる点としては、日本では蓋に土師質の専用の蓋を用いるのに対し、胡開文墨工場では磁器碗を流用し、把手の代わりに竹で碗を挟み込み使用する。また、下部の油を注ぐ皿に關しては、日本では土師質の皿を重ね、蓋との距離を調整するが、胡開文墨工場では磁器製の小皿が土台に固定されており、距離を調整することはできない。洪莉氏の話によると、中国においても墨の需要は激減しており、なかなかこのような伝統的な墨工場を維持していくことは難しいとのことであった。

三日目には、滞在期間が延びたこともあり、ホテルで自転車を借り、他の墨工場を訪ねてみることにした。黃山市徽州区に所在する曹素功墨工場は、ホテルから自転車で片道二時間程であった。黃山周辺の地形は起伏に富んでおり、急な坂道のために、自転車を降り、押して歩かなくてはならなかった。曹素功墨工場は、小規模な墨工場ではあるが、歴史は古

く、曹聖臣によって、明代末の墨工場である呉叔大を引く継ぐ形で一七世紀中頃に創業した。工場では、見知らぬ日本人の突然の訪問にも関わらず、代表の方が丁寧に対応してくれた。今回見学できたのは、墨の原料の煤を採集する工程、乾燥工程、墨型保管庫である。胡開文墨工場と比べ小規模であるが、基本的な製造方法は同様である。採煤工程は、年二回冬期を中心に行われる。この点は日本と同様である。墨型は手彫りの木型であり、膨大な量が保管されていた。日本においても木型が用いられ、形状等も同様である。中国の墨職人も、日本の製墨に關して興味を示し、いろいろと質問をしてきたことが印象的であった。

四日目には、「安徽南部の古村落」を見学した。二〇〇〇年に世界遺産に登録された古村落群で、西通と宏村の二村から構成される。この二村の他にも、黃山市周辺には多くの古村落があり、日本でいう「伝統的建造物群保存地区」のような形で保存されている。

このうち西通は、黃山市中心地からバスで一時間程の山道を走ったところにある。村落は、一世紀に胡氏を中心として成立し、塩や茶と

いった商業を中心に栄えた。村落内には、明清代の古建築が残されている。現在は、村民の生活空間であると共に、観光地化されており、ほとんどの建物が、観光用の土産店もしくは飲食店として利用されている。入村にあたっては、一〇四元(約一六〇〇円)のチケットを買う必要がある。

村落の景観は、村の東側を川が流れ、その水を村落内に引き込み水路が張り巡らされている。ただ、日本における環濠集落のような村全体を



写真4 胡開文墨工場の採煤工程

囲むようなものではなく、あくまでも生活用水としての利用である。

宏村は、西通から更にバスで三分程山道を走った、やや開けた盆地に位置する(写真5)。西通同様に一世紀頃に形成され、商業で発展した。ここも観光地化され、特に宿泊施設などが多い印象である。また、この付近の共通料金なのか、入村に一〇四元のチケットが必要である。村落の景観は、水路が完全な形で残され、南面と西面は、村を囲むように水路(池)が巡らされている。水路



写真5 宏村の外観

は、村内と村外を完全に区画するものであり、日本の環濠集落と類似する。

いずれの村落も、決して安くはないチケット代にも関わらず、中国人観光客で溢れており、集客の面では、成功していると言えるだろう。ただ、外物こそ伝統的な建物を利用してはいるが、内実は、どこにでもあるような土産屋ばかりで、伝統的な生活を感ずることは難しかった。

五、西安での生活

西安市内は、そこかしこに高層ビルや高層マンションが建ち並び、現在も外へ外へと都市の範囲が拡大している(写真6)。特に、地下鉄工事は急ピッチで進められている。私が滞在していた時には、地下鉄一号线から三号线までが開通しており、大雁塔や半坡遺跡への、地下鉄でのアクセスが可能であった。今後は、空港まで地下鉄が延びる計画で、市内の移動が更に容易になるようである。とはいえ、市内の移動の中心は路線バスである。路線バスは本数、路線共に多く、常に混み合っている。一部の路線を除いて、「長安通」と呼ばれる交通カードを利用でき、このカードを使うと距離に関係なく、〇・五元〜一元で利用できる。一方

で、車もかなりの台数が走っていた。通勤・退勤時間帯になると、幹線道路では慢性的に渋滞が発生していた。車は比較的新しい車種が多く、日本車の他、ランボルギーニやポルシェ、マセラティといった高級欧州車も多くみかけた。

西安では、西北大学賓館に滞在していた。ここには、留学生も多く滞在していた。韓国人留学生が多数を占め、日本からの留学生は少なく、五人程であった。西安にはブラザーや日立といった日系企業があり、日本人の駐在員もいるが、昔と比べ数が減っているようである。

六、食文化

全体的に物価の高い中国ではあるが、食品に関しては日本と比べて安い。少し豪華な外食でも、一食二〇元(約三〇〇円)以内で食べることができた。スーパーや西北工業大学付近の量り売りの露天で、食材を調達し自炊もしていた。自炊であれば、それこそ数円で満腹になるような食事を作ることができた。

西安で美味しいと感じたのは、やはり麺や餃子といった小麦製品である。特に麺類は、種類も豊富でほぼ毎日食べていた。

西安市内には日本食を出す居酒屋

もいくつか存在する。最近では、「丸亀製麺」「富山ブラック」といった、日系のうどん屋やラーメン屋が増えている。ただ、中国料理店と比べ割高で日本食＝高級料理との認識がある。ただ、ほとんどの店は現地の人が調理をしており、日本食とはいえ独特の味付けであった。その他、日本人が料理人をつとめる店も少なからずある。日本食が恋しくなると頻りに出入りしていたのは、南門近くにある「禾室 居酒屋」である。ここでは、日本人の料理人二人が調理



写真6 大雁塔から西安市街西側を望む

を担当しており、美味しい日本食を食べることができた。ただ、やはり日本から輸入された酒は高く、赤霧島の一升瓶が一〇〇〇元（約一六〇〇〇円）もした。

西安以外でも、上海、黄山、銀川で食事をしたが、それぞれ特色があり、食文化においても中国の多様性を感じた。上海では海鮮料理や小籠包などを食べたが、どれも日本人の口に合いそうな味付けであった。上海料理は、西安の人からすると甘い。そうで刺激が足りないようである。

一方、黄山では名物の毛豆腐、臭桂魚、キノコ料理を食べた。味付けは



写真7 銀川で食べた羊肉

いずれも塩辛く、発酵食品が多かった。特に臭桂魚は、味は比較的食べやすいものの、臭いが強烈であった。銀川は、イスラム教徒である回族が多いということもあって、豚肉料理よりも羊肉料理が多い。特に、馬強氏に連れて行っていただいた羊肉料理は、今回の中国滞在中で、もっとも美味しい料理であった（写真7）。

七、おわりに

中国での生活は、ひどい喉風邪や二度の水あたりで、体重は七キロ程落ちた。それでも、全体を通してみると、楽しく良い経験が出来た研修であった。それも、中国でお世話になった、語学の先生、西北大学文化遺産学院、陝西省考古研究院、中国社会科学院考古研究所、寧夏文物考古研究所、榆林市、日本人留学生、西安日本人会など本当に多くの方々との出会い、助けられたおかげだと思ふ。今後も、このような出会いを大切にして、日中両国の研究の発展に寄与していきたい。

研究所催し物・附属博物館

展示案内

檀原考古学研究所創立八〇周年
関連事業

第三八回奈良県立檀原考古学研究所公開講演会

『古代の王宮をさぐる』

共催…奈良大和古代文化研究協会
日時…平成三〇年一月二五日(日)
午後一時開始

会場…奈良県社会福祉総合センター
大ホール(檀原市大久保町三三〇)
内容…

当研究所研究顧問 石野 博信
「ヤマト王権は纏向から始まった」
当研究所特別指導研究員

前園実知雄
「雄略天皇・泊瀬朝倉宮を求めて」
当研究所所長 菅谷 文則
「飛鳥宮から藤原宮・平城宮そして平安宮へ」

檀原考古学研究所創立八〇周年
関連事業

秋季特別展(開催中)

『古代の輝き』

開催期間…平成三〇年一〇月六日
(土)～一月二五日(日)
研究講座…
第三回 一月一日(日)
山と寺の考古学特集

山の考古学研究会会長 森下 恵介
「考古学からみた大峯奥駆道の成立

―修験道の確立をめぐる―
当研究所所長 菅谷 文則
「斑鳩の寺と明日香の寺―聖徳太子をめぐる―」

海外交流

◇海外技術研修員受入事業(国際課事業)
受人研究員…劉斌氏

(中国陝西省西北大学文化遺産学院)
期間…平成三〇年九月二五日
平成三一年三月一五日

◇奈良県・陝西省戦略的専門分野交流事業(国際課事業)

派遣職員…北井利幸所員
派遣先…陝西省西北大学文化遺産学院・陝西省考古研究院
期間…平成三〇年一月一日
平成三一年三月一五日

◇韓国国立文化財研究所との交換研修事業
受人研究員…洪バルグン氏
(国立扶余文化財研究所)

期間…平成三一年一月七日
三月一五日
派遣職員…岩越陽平所員

期間…平成三一年一月九日
三月一五日